

ナチュラルキス
～新婚編～

C o n t e n t s

ナチュラルキス～新婚編～ 5

啓史 side 265

ナチュラルキス
～新婚編～

プロローグ

高校二年生、十七歳の榎原沙帆子は、平凡な女子高生……だった。

つい、一昨日までは……

いま、彼女の左手の薬指には、副担任である佐原啓史と結婚した証として、結婚指輪がはまっ
てる。

事の起こりは、ひと月ほど前のバレンタインデーだ。飯沢千里、そして江藤詩織というふたりの
気の合う友人に恵まれ、楽しい学校生活を送っていた彼女だったが……なんと突然、父親が転勤す
ることになったのだ。

両親とともに彼女も遠方に引っ越さなければならなくなり、仲のいい友達と別れることを思うと、
ひどく辛かった。それだけでなく……好きなひと——佐原とも会えなくなる。

引っ越しなどしたくない。けれど、未成年の沙帆子は両親についていくしかない。
誰にも相談できず、精神的に追い詰められている間にバレンタインがやってきた。

そして彼女にとって、その後の運命を変える五時間目、佐原の化学の授業が始まった。

授業をしている佐原を見つめていた沙帆子は、あまりの切なさに気分が悪くなってきた。引っ越

してしまつたら、もう彼の姿を見ることも声を聞くこともできなくなる……

体調の悪そうな沙帆子の様子に、隣に座っていた男子生徒が気づいた。彼が心配して彼女に声を
かけたのをきつかけに、事態は思わぬ方向へ……

なんと、佐原が心配し、沙帆子は彼専用の部屋でしばし休むことになった。さらに、ソファに横
になると、佐原は彼女の身体の上に自分の白衣をかけてくれたのだ。

気分が悪くなければ、天国にいるような心地だっただろうが、いかんせん、体調は最悪……沙帆
子は知らぬ間に寝入っていた。

しばらくして目を覚ますと、憧れのひとが自分の顔を覗き込んでいた。

体調が悪くなった理由を聞かれた沙帆子は、佐原に引っ越さなければならなくなったことを告げ
た。

すると佐原は、転校しなくてすむように、自分が沙帆子の両親に直談判すると申し出たのだ。

思いもしなかった展開に、沙帆子は舞い上がった……

両親と佐原の話し合いは、思いがけないほうへ進み……なぜか沙帆子と佐原が結婚するという、
とんでもない結論に落ち着いた。

状況についていけない沙帆子を置き去りに、結婚の準備はどんどん整っていく。式場に見に行
き、佐原の両親にも挨拶しにいった。そこで彼女は、啓史の兄である徹が、実は自分の中学時代の
担任、テッチン先生だったと知る。

両家の顔合わせも済ませ、結婚の話は、実現に向けて着実に進行していった。

そして迎えた三月十日の土曜日。
彼女は憧れのひとであった佐原啓史と結婚し、佐原沙帆子となった。

この物語は、結婚式の翌日、夫となった啓史とともに、沙帆子が実家である榎原家へ挨拶に訪れる場面から始まる。

1 我が家

両親の住むアパートの玄関を前にし、沙帆子は奇妙な気分に分かれていた。
昨日まで、わたしの家だったのに……

いまはもう……我が家じゃないんだ。

腕に抱えている大きな花束が、異質なものに感じられる。この花束は、結婚式場から持ってきたものだ。

嘘みたいな話だけど……これは現実で……

彼女はごくりと唾を呑み込んだ。

そんな沙帆子の動揺をよそに、啓史はなんでもなさそうにインターフォンを押した。

馴れ親しんだチャイム音が鳴り響き、数秒してドアが開いた。

母、芙美子の顔を見て、息が詰まりそうになる。

いつもだったら、「おかえりい」と弾んだ声で出迎えてくれるのに、今日は何も言わず、ただにっこりと微笑んでいる。

「あ……マ、ママ。あの、こ、これ……」

玄関に入った沙帆子は、ぎこちない仕草で芙美子に花束を差し出した。

「あら。きれいじゃない。これ全部もらっているの？」

「う、うん。式場に飾ってあった花、好きなだけ持って帰っていいって……」

「それで、全部持って帰ってきたの？」

「うん。もつたないから……綺麗だったし……」

母と普通に会話できたことで、少し気持ちが落ち着く。だが、家の奥に佇んだまま、近づいてこようとしない父の幸弘を見た途端、よくわからない感情が胸に込み上げてきた。

パパ……

「今日の夕食になるようなおかず、パックに入れておいたから持って帰りなさい」

芙美子はそう言って大きな紙袋を沙帆子に差し出したが、父を見つめていた彼女はそれに気づかなかった。

「すみません。助かります」

横合いから啓史が言い、沙帆子はハツとして視線を戻した。啓史は頭を下げて、芙美子から紙袋を受け取った。

「それは？」

我に返った沙帆子は啓史に問いかける。

「夕食のおかずをパックに入れて下さったそうだ」

啓史が説明してくれ、沙帆子は母にお礼を言う。

「あ、ありがとう」

「え、ええ」

芙美子は返事をしたあと、幸弘に声をかけた。

「幸弘さん」

呼びかけても、幸弘はその場から動こうとしない。それを見て、沙帆子は息をとめた。少しでも気を緩めると、泣いてしまいそうだ。

喉が苦しい。胸も痛い。

沙帆子は奥歯を噛みしめた。

……変わってしまったのだ。

わたしの家は……もうここじゃないんだ。

わあっ！ と叫んで、母の腕の中に飛び込みたくなった。笑みを浮かべている母も、こちらにやっ
てようとしないうちも、あらゆる感情を抑えているのがわかる。

そしてそれは、わたしも同じで……

いつの間にか拳を作っていた沙帆子の手を啓史がぎゅっと強く握った。

「沙帆子」

彼の声を耳にし、再び大きく揺らいでいた感情が少し落ち着きを取り戻した。

すると、それまで動こうとしなかった幸弘が、強張った顔をして歩み寄ってきた。

「明日から学校だからな、ふたりとも気を引きしめて生活しろ」

幸弘は固い声で言う。

「わかりました」

啓史は神妙に答え、「あの……」と、いくぶん言い難そうに、口を開いた。

「今日から数日は……今後の暮らしに慣れていくために、沙帆子さんとふたりで生活したいのです
が……」

えっ？

「そうだな。それがいいだろう」

幸弘が頷くと、啓史はほっとしたように息を吐き、さらに言葉を続ける。

「それで木曜日からおふたりが引越越される日までは、こちらで夕食をいただいてもよろしいで
しょうか？」

「おお、いいぞ」

幸弘はそれだけ言い、口を噤んだ。

みんな必要最低限のことしか話さず、間が持たない。

沙帆子はいたたまれず、俯いた。

そのとき、啓史が肩を叩いてきた。顔を上げると、沙帆子の頭の上にポンと手を載せる。

「それじゃ、行こうか？」

行く……という言葉に、胸がひどくひりついた。

沙帆子はその事実を啓史に悟られないように、平静を装って頷いた。

「そ、それじゃ、パパ、ママ」

沙帆子は玄関から出ると、両親に向かって小さく手を振る。

ドアがパタンと閉じた。

胸が震える……心が不安定なせいで、足元がぐらついているように感じる。

「行こう」

啓史の声に、彼女は素直に従おうとしたが、足が動かない。

「ほら」

啓史はそっけない口ぶりで言い、沙帆子の手首を痛いほどの力で握りしめ、引つ張って歩き出した。

「ばーか」

予想外の言葉が飛んできて、沙帆子は泣きそうな顔で唇を突き出す。

「なんで……なんで、馬鹿なんですか？」

「泣けばいいだろっ！」

沙帆子は啓史をマジマジと見つめた。

えっ？

「我慢すんな、馬鹿野郎！」

乱暴な言葉遣いなのに、啓史のやさしさが痛いほど胸にしみてくる。

もおっ、わけわかんないよお……

「だから、なんで馬鹿なんですかあ」

沙帆子は空いている手で、啓史の胸を無茶苦茶に叩いた。

「知るかつ！」

「おかしいですよ！」

様々な感情が入り乱れ、何がなんだかもわからない。

涙がどつと溢れ、沙帆子は啓史の胸に縋りついた。

すると、力のこもった啓史の腕が背中に回ってくる。彼女は顔を彼の胸にぎゅっと押しつけた。

彼女は涙がとまるまで泣き続けた。

泣くことには、やはり浄化作用があるらしい。泣くだけ泣いてすっきりしたからか、沙帆子は落ち着きを取り戻していた。

あの場で受けたショックは、一度は味わわなければならなかったのだ。

次に両親と対面したときは、きっと大丈夫な気がした。

啓史の車の助手席に座った沙帆子は、彼に気づかれないように、指先で瞼の腫れ具合を確かめた。

思った以上にぶよぶよとしていて、がっかりする。

きつと、みつともないほど腫れてるんだろうなあ。
思わずため息が零れる。

早く腫れが引かないかな？ こんな顔、佐原先生に見られたくない。

「何か買い物とか……」

沈黙が占めていた車内で、啓史が突然口を開いた。沙帆子は思わずビクツとする。

「は、はい？ な、な、なんですか？」

「いや、何やってんだ？」

訝しげな視線を向けられ、沙帆子は顔をしかめた。

「な、なんか……まぶた瞼が重くて……」

「そうやってると、重みが軽減されるってのか？」

「そ、そういうわけでは……ないんですけど……」

「……買い物とか、していかなくてもいいか？」

「買い物ですか？」

「買うものがあるんなら、このままスーパーに寄ったほうがいいだろ」

「これといってないです」

「それじゃ、まっすぐ帰るぞ」

「はい」

泣いてしまった気恥ずかしさが、いまの会話によって消えた。意図して話しかけてくれたのかわ

からないが、沙帆子は啓史に感謝した。

「お前は花を運べ」

啓史のマンションに到着すると、彼は沙帆子に言った。

荷物がいっぱいあるのだ。

啓史は花束を沙帆子に持たせ、自分は後部座席にある荷物を抱えた。

「先生、そんなにいっぱい抱えて大丈夫ですか？」

「心配すんな。ほら、玄関の鍵を開けるから、ついてこい」

荷物を持って歩き出した啓史の後ろを沙帆子がついていく。

玄関の鍵を開けると、啓史はさっさと部屋に上がった。けれど、彼女は妙に改まった気分になり、大きく息を吸い込んだ。

——今日からここが、我が家なんだ。

2 とまらないドキドキ

あつ、そうだ。花を生けるための花瓶が必要だけど……
花束を居間のテーブルに置き、沙帆子は周りを見回した。

うーん、佐原先生は花なんて飾らなさそうだから、きつとこの家には花瓶なんてないだろうな。どうしよう？

いい案が浮かばず、困った沙帆子はとりあえず玄関に足を向けた。啓史は荷物を取りに行っているらしく、玄関には荷物が山のように積まれていた。

よし、まずはこれを片づけよう。

キッチンに運び込むものを選び、手に取る。そうしていると、新たな荷物を持った啓史が戻ってきた。

「もう終わりそうですか？」

「ああ、これで最後だ」

さ、最後？

そんなはずはない。……だって、ここには「でかうさ」がない。

でかうさは、啓史の親友の飯沢敦——千里の従兄でもある——が結婚のお祝いにくれた、とんでもなく大きい、ピンクのうさぎのぬいぐるみだ。なぜか啓史は、そのでかうさを毛嫌いしているのだ。強力なパンチを食らわせ、すっ飛ばしたこともある。

でかうさのことを聞きたかったが、やはり口にしづらい。

でも、でかうさは気になるよお。

聞いてみようか迷っているうちに、啓史は家に戻ってしまった。

「この荷物はどこに置けばいい？」

「あつ、それはクローゼットルームに」

「了解」

スマートな返事をし、啓史は荷物を運んでいく。そんな彼の姿に、沙帆子はぼおつと見惚れた。カ、カッコイイ……って、そんな場合じゃないっての！

自分に突っ込み、でかうさのことを考える。

でかうさ……車のトランクに置き去りなんだよね？ か、可哀想なんだけど……

佐原先生、家に入れてあげるつもりはないのかなあ？

「うん？ どうかしたのか？」

戻ってきた啓史に問いかけられ、ごくりと唾を呑み込む。い、言うならいまだ。

「は、はい……あのお」

「は、ダメだ……言い出せないよお」

でかうさ、ごめん！

沙帆子は心の中で、でかうさに手を合わせ、話題を変える。

「は、花を……あの大量の花をどうしようかと思って……花瓶って、ありますか？」

「ああ……そんなもんじゃないな。そうか……花瓶か……何か代用できるものを探すしかないな」

「は、はい。お願いします」

頭を下げると、啓史はまた荷物を持ち上げる。

「こいつも、クローゼットでいいのか？」

「はい。そのあたりのは全部。これとこれは、キッチンに運ぶので」
「それじゃ、そっちはお前頼むな」

「りよ、了解」

啓史の口調を真似ると、彼は笑いながら荷物をクローゼットに運んでいった。啓史の後ろ姿を見つめ、沙帆子は顔をしかめる。

でかうさの件について尋ねるのは時機を見計らおう。うん、そうしよう。

「おい、沙帆子」

食料品を冷蔵庫にしまっていると、啓史が声をかけてきた。

「は、はい」

「これとかじゃ、ダメか？」

啓史はプラスチックのゴミ箱を手にしている。これを花瓶の代わりにしたらどうかということらし。う。

「それ、使ってもいいんですか？」

「居間にゴミ箱がないのは不自由かもしれないが……他にないしな。ちゃんとした花瓶を買ってくるまで、とりあえずこれで代用してくれ。水を入れてみたんだが、漏れたりもしなかったぞ」

「わかりました」

プラスチックのごみ箱は、かなり頑丈な造りだった。これなら大丈夫そうだ。

花を活けてみたら、ちゃんと花瓶らしく見えて笑ってしまった。

花は居間のテレビの横に飾ることにした。

わーっ、部屋が華やかになった。

「ああ、いいな」

啓史の声に、沙帆子は振り返った。

「いいですよ。花瓶なんてなくても、もうこれでよさそうですよ」

そう言うと、啓史が苦笑する。

「けど、そうなると居間にゴミ箱がないままだぞ。ちよつと不便じゃないか？」

「花が枯れたら、またゴミ箱として使えるし……キッチンも近いんですから、さほど不便じゃないと思いますよ」

「そうか。……なあ、早く夕飯にしてくれないか？ 腹が減った」

「わかりました。ママがおかずをくれたから、温めるだけだし、すぐに食べられますよ」

急いで冷蔵庫を開ける。

「そうだ。沙帆子、お前、先に洗濯物を出せ。洗濯しとこう」

「あつ、はい」

啓史のセリフに、沙帆子はちよつとドギマギしてしまった。

洗濯か……すごく親密さを感じてしまう。これからわたし、佐原先生とここで暮らすんだよね。

キッチンから出ると、沙帆子は桃色の藤のバスケット——ここにお泊まりしたときにも使ったバ

スケツトだ——から自分の洗濯物を取り出した。

洗濯物の中には下着もある。沙帆子は下着を他の洗濯物の中にくるっと丸め、洗濯機のある洗面所に向かった。

ネットに下着を入れてっていると、啓史がやってきた。焦った沙帆子は顔を赤くして背を向けた。「うん？ 何をやってる？」

「せ、洗濯する準備をして……」

「準備？ 準備ってなんだ？」

不審そうに尋ねながら、啓史は沙帆子の手元を覗き込む。驚いた沙帆子は「きゃっ」と叫んで、啓史から離れた。

「な、なんだ？ お前、何を隠してるんだ？」

聞かれたところで答えられるはずがない。

黙っていると、さっと伸びてきた手に、隠したものを奪われた。

「ダ、ダ、ダメえ。やめてえ、返してえ」

ぴょんぴょん飛び跳ねながら取り戻そうとするが、沙帆子の手が届かない高さまで持ち上げられて取り返せない。しかも啓史は、それをしげしげと眺めている。

や、やだーっ！

「あ」

小声で呟いた啓史は、奪ったものを沙帆子の手に握らせた。そして、何事もなかったかのように

洗面所から出ていく。

啓史の顔は赤く染まっていた。

「先生ってば……」

沙帆子も彼に負けず劣らず顔を赤くしながら、我慢できずに笑い出した。

芙美子からもらったおかずを、皿に盛りつけて並べたら、ずいぶん豪華な夕食になった。

「うまそうだな」

啓史が嬉しそうに言い、ふたりはさっそく食べ始めた。

芙美子が作った料理はどれも美味しかった。ちよっぴり胸を切なくさせつつも、沙帆子は母に感謝していた。謝っていた。

夕食を終え、啓史は食べ終わった皿を洗い場にいる沙帆子に、カウンター越しに手渡す。

片づけくらいひとりでもできるのだが、啓史はふたりでやると決めているようだ。

沙帆子の両親は、目に余るほど仲がいいが、父は家事をいっさいやらない。

父が掃除機をかけたり、風呂を掃除したり、皿を拭いたりしているところを、沙帆子は見たことがない。

それはもちろん、母が専業主婦だからで……母が働いていたら、違ったかもしれない。

母が風邪を引いたりすれば、父だって家事をするだろうが、母が寝込んだという記憶が、沙帆子にはない。

ママって、とつても健康なんだよね。パパは高熱を出して寝込むこともあるけど……
というわけで、啓史が家事を手伝ってくれることは嬉しいが、そんな環境で育った沙帆子はなんとなく違和感を覚えてしまう。

……パパとママ、佐原先生が家事を手伝っているなんて思いもしないかも……

テーブルの上のものをすべて片づけた啓史は、キッチンに何も言わずに入ってきた。そして、沙帆子の洗ったお茶碗を手に取る。

狭い空間にふたりきりでいると、無性にドキドキする。

「これは、どこにしまえばいい？」

お茶碗をすすいでいた沙帆子は、啓史に問いかけられて顔を上げた。

今日おろしたばかりのお皿を手にし、啓史は食器棚を眺め回している。

「それは……わたしがあとで片づけますから」

「お前があとで片づけるより、俺が一度場所を覚えれば、今後スムーズだろ」

沙帆子は思わず笑みを浮かべた。

濡れた手を拭きながら、啓史に場所を教える。

先生、家事なんて手伝いそうもないのに……ほんと意外。絶対、亭主関白なタイプだと思ってた。

だって、初めて化学室の前に繋がる垣根の抜け穴をくぐって彼のところに辿り着いたとき、有無を言わせず千円札を渡してきて、パシリに使われたのだ。

以前はそんなに強引だったのに、いまは一緒に片づけをしてきている……

ふっと、頬が緩む。そんなに前のことじゃないのに、懐かしい……

……なんだか、奇跡が起こったみたい。

夕食の片づけを終えると、沙帆子は啓史に風呂に入れと言われたが、先をゆずった。

ひとりになった沙帆子は、落ち着かない気分ですわでソファに座っていた。

佐原先生の部屋にいる自分……全然現実味がない。

……ママに電話してみようかな？ それか、千里とか、詩織とか……

沙帆子は立ち上がり、自分のバッグから携帯を取り出した。

すると、「沙帆子」とふいに声をかけられた。

啓史が風呂から上がったらしい。

彼に視線を向けた沙帆子は、驚いて固まった。

パジャマの前をはだけた啓史が、髪をタオルで拭いている。

な、なんとも……せ、せ、セクシー！

沙帆子は手にしている携帯をぎゅっと握りしめた。

写メ撮りたい！

けれど、いいぞなんて、啓史が快く言ってくれるわけではない。

「ほら、風呂」

「は、は」

沙帆子は用意しておいた着替えを持って、風呂場に行こうとした。すると、すれ違いざま、啓史に抱き寄せられた。

うっ、わわわ……

先生、胸のところ、肌が……肌が……

啓史の素肌が密着し、頭がくらくらする。

「早く上がってこいよ」

耳元で囁かれた。

セクシーな啓史の声に、沙帆子はできそこないのロボットのようにカクカクと頭を上下させた。

湯船に浸かった沙帆子は、ほっと息をついた。

なんかもう、色々あり過ぎて……疲れちゃった。

明日からは、ここから学校に通うんだよね。

それはひどく異様なことのように思えた。

朝は早起きして朝食を用意して……あ、お弁当も作らなきゃならないし……そうだ、夜のうちに時間割も確認しておかなきゃ……

色々考えすぎて、頭がゆだつてきた沙帆子は、ふらふらしながらお風呂を出た。

「あ、あれっ？」

用意していたイチゴ柄のパジャマがない。

いったいどういうこと？

パジャマがあった場所にはバスタオルが置いてある。この家には啓史と沙帆子しかない。当然、パジャマとこれを入れ替えたのは、啓史だ。

しかし、なぜバスタオル？

まさか、これだけ身体に巻いてこいつて？

もおっ……佐原先生つてば、いったい何を考えて……

顔を歪めながらそれを広げた沙帆子は、面食らった。

これ、バスタオルじゃない。こ、こいつは……いつぞやの……

啓史と一緒に寝間着を買いに行ったとき、彼が勝手に買ったバスローブだ！

すっかり忘れていた。つまり、こいつを着て出てこいと？

あーりーえーないー！

頭を抱えてしゃがみ込む。

バスローブだけを身にとった姿で、佐原先生の前に出ていくなんて……死ぬほど恥ずかしい。

先生、自分のぶんのバスローブも一緒に買っていったのに……わたしにだけこれを着るなんて……

憤懣ふんまんやるかたなかつたが、まさか裸で飛び出て行って、パジャマを返せと怒鳴るわけにもいかな

い。そういえば、ここに初めてお泊まりした日、バスタオル一枚の姿を先生に見せてしまつて、も

のすごく恥ずかしい思いをしたんだ。あんな思いはもう二度としたくない。となれば、こいつ

を着て出るしかないのか……

沙帆子はむっとしてバスローブを羽織り、ウエスト部分を紐でぎゅっと縛った。

居間に戻ると、啓史はソファに寝転がっていた。

先生、寝ちゃってるのか？

ほっとした沙帆子は、足音を忍ばせて啓史の顔を覗き込んだ。

「きゃっ」

寝ているものと思っていた啓史の腕が突然伸びてきて、彼女は彼の身体の上に倒れ込んだ。

「先生、寝てたんじゃ？」

「寝ていられるか」

啓史はそう言っ、にやりと笑い、視線をすつと下げた。

啓史の視線を追うと、バスローブがはだけ、胸のふくらみがすべて見えている。沙帆子は激しく狼狽した。

素早く胸を隠そうとした沙帆子だったが、すでに啓史の手によってふくらみが包み込まれていた。胸にじかに触れられて、沙帆子は固まった。

「明日は学校だからな、今夜は自粛するべきかとも考えたんだが……」

「は、はい。あ、明日の用意しとかなくちゃ……はふん」

あられもない声を上げてしまった沙帆子は、真っ赤になった。啓史が指先でふくらみの先端を刺激したのだ。

「や、う」

「明日のね……」

「はうっ！ せ、先生い〜」

「啓史」

「け、け、啓……」

首筋を這っていた唇が、胸へと移動した。

啓史の唇は、沙帆子に耐え切れないほどの刺激を与え始めた。さほど時間が経たぬうちに、彼女は切ない声を上げている自分を意識することもできなくなっていた。

3 がっかりのため息

「沙帆子」

う……ん？

いまの……声……せん……せい？

「沙帆子、そろそろ起きろよ」

その声は少し遠くから、聞こえてくるようだ。

声の主は、わたしの……

布団の中で身体を丸めていた沙帆子は、なかなか開かない瞼を、なんとかこじ開けようとした。

「沙帆子？」

「は……あふっ……い」

返事の合間に欠伸をしつつ、沙帆子はむっくりと起き上がった。

「眠いか？」

「……眠いです……」

頭を下げ、沙帆子は目を閉じたまま答える。

「寝かせておいてやりたいのは山々だが……。休むわけにはいかないだろう？」

休む？

そ、そうだ。今日は学校だ！

沙帆子は慌ててベッドから右足を下ろす。

「お、おいつ！」

啓史が声を上げて、待ったをかける。

「先生？」

「お、お前なあ」

ドアのところ立ってこちらを見ていた啓史が飛んできた。

へっ？

啓史は、沙帆子のはだけたバスロープの前を合わせた。

「あ、あ、あ……」

わ、わ、わたしってば、か、完全に……は、はだ、裸……

きやあ〜っ！

言葉にならない悲鳴を上げる。

「ほら、ちゃんと目を覚ませ」

顔に全身の血が集まったような気がした。ユデダコのごとく真っ赤になった沙帆子は、自分の身体を抱えこんだ。

な、なんてこった！

朝っぱらから、佐原先生に、こんな姿を晒してしまうとは……

「よし、起きたな」

啓史はひどくそっけなくそう言うと、ドアを閉めて去っていった。

バスロープ一枚の姿で、これからすべきことを考える。

ど、どうすりゃいいんだ？ そうだ、朝ご飯と、お弁当を作らなきゃ。

そ、それから……と、とにかく着替えなきゃ！ わたしの下着は？ 制服は？

——そうだ！ 玄関横のクローゼットルームだ！

沙帆子は寝室のドアに向かって突進したが、そこでまた固まった。この向こうには、当然先生がいるんだよね？

ためらいながら、ドアからそっと顔を出す。

「早く着替えてこい」

啓史の声が居間のほうから聞こえる。

「は、はいっ。あの、着替えたらすぐに朝食作りますから」

「いま五時五十分だぞ。六時半くらいには家を出たい。朝食の支度できるのか？ 弁当はもう作らなくていいぞ」

な、なんと、もう四十分しかないのか？

「急いでみます」

返事をして、沙帆子はクローゼットルームに走った。

さっさと支度すべきなのに、頭が混乱してなかなか着替えを終わられない。

やっと制服に着替えた沙帆子は、エプロンを手にして居間に駆け戻った。

キッチンに入り、朝食の準備を始める。トースト、サラダ、飲み物を注いだコップなどをカウンターに置いていくと、啓史がテーブルに運んでくれた。

軽くバターを塗り、トーストを食べている啓史を、ちらちら見つめながら、沙帆子はイチゴジャムをたっぷり塗ったトーストをかじった。

わ、わたしたち、新婚さんなんだよね？

改めて考えると、心臓がバクバクする。

先生はスーツのズボンにワイシャツ姿でいる。まだネクタイを結んでおらず、ちよつと着崩れた感じが新鮮だ。

こ、こんな先生の姿を見られるのって……も、もしかして、わ、わ、わたしだけの特権？
いまのわたし、佐原先生を独り占め？

し、しあわせかもお〜。

「ほら、ぼおつとしてんな。沙帆子、早く食え」

啓史は眉間を寄せて、沙帆子を叱る。

「は、はい」

沙帆子はぺこぺこ頭を下げて謝ったが、内心ちよつとむっとしていた。

確かに、先生に見惚れてぼおつとしてたけど、叱ることないのに……

新婚さんなんだしい、なんかもつとこう、あ、あま〜い言葉を……

沙帆子はサラダをつつきながら、しょぼんと眉を下げた。

なんか先生、結婚する前とちよつとも変わってない……

……ほやほやの新婚さんなのに……

……この佐原先生相手に、甘さを期待するだけ無駄なのか？

残念な気分で見つめた沙帆子は、彼の左手の薬指を見てときめいた。が、その直後、眉をひそめる。

「せ、先生。あの……」

「家では啓史と呼べ」

そう命じられ、口を尖らせる。

「だ、だって、名前で呼んじやったりしたら……学校でも……。い、いや、そんなことよりですね。先生、その指輪」

そう口にした沙帆子は、ハッと自分の左手に目を向けた。自分も結婚指輪をつけたままじゃないか。

「お前は、外すしかないだろうな。仕方がないしな」

啓史は面白くなさそうに言い、また朝食を食べ始める。

いや、そういうことではなく。

「だ、だから、その指輪……ま、まさか、つけていくつもりじゃないですよね？」

狼狽しながら聞くと、啓史は訝しそうに沙帆子を見つめる。

「なんで？ つけてくけど……」

あ、あっさり肯定ですか？

哑然とした沙帆子だったが、啓史に抗議する。

「ダメですよ。学校中、大騒ぎになりますよ」

「大袈裟だ。……まあ、多少騒ぎになったとしても、数日で収まるだろう。いいから飯食え。弁当は作るのか？」

「つ、作りますけど……」

沙帆子は大きな不安を抱きつつ、急いで朝食を食べ終えた。

「テーブルの上のものは俺が片づける。お前は弁当を作れ」

啓史の申し出をありがたく受け、沙帆子は弁当作りに取りかかった。

「忘れ物ないか？」

走り出した車の助手席で、鞆の中身を確かめていた沙帆子は、啓史の言葉に頷いた。

「どうやら忘れ物はないようだ。夕べ、時間割を揃えておくつもりだったのに……」

それどころではなくなった理由が頭にまさまじと蘇り、沙帆子はぎゅっと叫びそうになった。

いつもと変わらない表情で運転している啓史を見ると、昨夜のことが嘘のように思える。

ほんとにわたし、佐原先生と結婚したのかな？

そんな疑問が胸に湧く。

今頃、ママとパパはどうしているだろう？

パパは会社に行く準備をして、ママは朝食の支度中かな……

沙帆子は啓史の薬指にはまっている指輪を見つめ、自分の薬指に視線をやった。

実は、自分もまだ指輪をつけたままなのだ。外さなければならぬのはわかっているのだが、ふんざりがつかない。

結婚式で佐原先生にはめてもらった指輪……

自分だけ外さなきゃならないなんて……

「どうした？」

黙り込んでいる沙帆子に、啓史が声をかけてきた。

「なんか、嫌だなんて」

「嫌？ 嫌って、何が？」

「指輪ですよ。先生は外さないのに……わたしだけ外さなきゃならないなんて、不公平ですよ」

沙帆子は肩を落とし、我知らずため息をついていた。

すると啓史は、車のスピードを落とし、路肩に停めた。どうしてこんなところで車を停めたのかわからず、戸惑う。

「先生？」

啓史の手が伸びてきて、身体をぐっと引き寄せられる。沙帆子は自分を見つめる啓史の目をドギマギしながら見つめ返した。

「俺も外してほしくない。でも、外さないわけにはいかないものな」

啓史の言葉に、胸がジーンとする。

彼の手に、自分の手を重ねた。

そう思ってもらえるだけで、もう充分だ。

泣きそうになっていると、ほんの少し笑みを浮かべた啓史の顔が近づいてきて、ふたりの唇が重なった。

4 ふつとんだ高揚感

ふたりは啓史の伯父夫婦が所有する果樹園内の別荘近くに車を停めた。学校からほど近い果樹園の小道を歩く。

辺りには静けさと朝の清々しい空気が広がっている。この自然いっぱい風景の中を、啓史と歩くことにしあわせを感じる。

沙帆子はすぐ近くにある啓史の左手を見つめた。

手を繋ぎたいけど勇気が出ない。

先生から繋いでくれればいいのに……

ちえっ。

勇気の出ない自分がかっかりだ。

わたしが手を繋ぎたがっていることに気づいてくれない先生にもがっかりだ。

しばらく悶々としながら歩いていると、学校の敷地に続く背の高い生垣に辿り着く。啓史は鍵を取り出すと、生垣に造られたドアを開けて沙帆子を先に通らせ、自分も続いた。

鍵をかけた啓史は、「行くぞ」と彼女に声をかけて校舎に向かう。人気のないうちに到着するようになったから、授業開始までまだまだ時間がある。

ひとまず啓史専用の部屋に向かおうとするが、ふたりが一緒にいるところをひとに見られては困る。念には念を入れて、彼女はいったん啓史と別れ、抜け穴に向かった。

啓史の部屋の前にやってくると、すでに窓が開けられており、彼が待っていた。

「ほら」

啓史は両手を差し出し、窓の外にいる沙帆子を抱き上げる。部屋の中に入った彼女は、なんだかおかしくなり、くすくす笑った。

「どうした？ 何がおかしい？」

「……こうして先生に抱えられて、窓から入ってる自分が、おかしくなっちゃって……」

「ふーん」

沙帆子の気持ちをどう理解したのかわからないが、啓史はそんな返事をして、すつと背を向ける。いつものようにコーヒーを淹れているようだ。

そんな啓史を見つめながら、沙帆子は通学靴をテーブルの端に置き、ソファに座った。

聞かえてくるのは、佐原先生が立てる小さな音だけ……

「静かですわね」

この世界に、ふたりだけしかないような感覚を覚え、沙帆子は啓史に小声で話しかけた。

「そうだな……」

啓史も静かに答える。

スーツ姿の啓史の背中を見つめ、沙帆子は感慨に浸った。

彼をこんな風に見つめていられるしあわせと、ちよつぴり切ない気持ち……

今日は月曜日だから、化学の授業はないのだ。

「ほら」

コーヒーカーップを差し出され、沙帆子は受け取った。啓史もカップを手にして沙帆子の隣に座った。ふたりの間には、二十センチほどの距離がある。

寄り添ってほしかったのに……ちよつと物足りない。

「月曜日だな」

「は、はい」

「俺の授業ないな。お前のクラス」

「はぐ」

沙帆子の返事を聞いて、啓史は頷き、コーヒーを啜る。

いまの言葉……何か意味があつて、先生は口にしたのかな？

「昼、あいつらと飯食べてから、こっちにくるか？」

沙帆子は顔を上げて、啓史と目を合わせた。

それって、来てほしいってこと？

「き、来ていいなら……来ます」

「そうか」

その声は沙帆子の耳にとてもやさしく響き、彼女は喜びを囁みしめた。

来ていいんだ。佐原先生、来てほしいって思ってくれてる。

コーヒーを半分ほど飲んだところで、沙帆子の携帯がバイブ音を発した。ポケットから取り出すと、千里からのメールだった。

「千里からのメールです」

聞かれたわけではなかったが、沙帆子はそう報告しながらメールを開いた。

（沙帆子、おはよ。今日は学校に何時に来る？ もちろん、啓ちゃんと一緒になんだよね？）

沙帆子は『啓ちゃん』の文字にぎよっとし、思わず彼のほうに顔を向けた。こちらを見てはいないことにほっとしたが、落ち着かない。

気持ち的には、画面を隠したかったが、怪しい動きをしていたら変な疑いをかけられてしまう。

沙帆子は急いで返信した。

（千里、おはよう。もう学校だよ。いま先生の部屋にいるの）

（そうなんだ。誰かに見られたりしなかった？ 大丈夫？）

（うん。大丈夫）

そこまでやりとりをしたあと、沙帆子は啓史に視線をやった。

「先生、秘密の入り口のこと、千里に話してもいいですか？」

「秘密の？ それって、お前の穴のことか？」

「ち、違いますよお。それに、お前の穴とか言わないで下さい。なんかいやです……」

ぶーっとむくれて言うと、くすすと笑われた。その笑みに胸がきゅんとする。

「それじゃ、秘密つてのは……ああ、生垣のドアのことか」

啓史は眉を寄せて思案し始めた。

「あの場所のことは……悪いが内緒にしておいてくれ」

「わかりました」

「飯沢、なんだって？」

「誰かに見られなかったかって、心配してくれてます」

「ひとりには見つからない入り口があるなんて言ったら、飯沢のことだから探し出しそうだな」

確かに、それは言える。

「それじゃ、そうだな……人気のない早朝に来て、重々注意してることいいんじゃないか」

「そうですね。それじゃあ、そう返事をします」

沙帆子は頷き、文字を打つ。送信して携帯をポケットにしまおうとした沙帆子は、ふと婚姻届を出しに行ったときに撮ってもらった写メのことを思い出した。

「あの、先生。写メの転送は？」

あのとき、ツーショットの写メを役所の人に撮ってもらったのだ。あいにく、沙帆子はそのとき携帯を持っていなくて、自分の携帯にはデータがない。

沙帆子の携帯に転送すると約束したのだが、いまだに見せてもらえていない……

「うん？」

沙帆子は啓史に期待のこもった目を向けた。

お宝画像を早く手に入りたい。デジカメで撮った写真も早く見せてほしいが、まずは写メの確保が先。

「写メか……まだ確認してなかったな」

そう言っつて、啓史はのんびりとコーヒーを飲み続ける。期待に胸を躍らせていた沙帆子は、口をへの字に曲げた。

「先生、意地悪しないで、早……」

ぎろりと鋭い眼差しを向けられ、沙帆子はうつと息をとめた。

「意地悪だ？」

「い、い、いえ。い、いまのは言葉のアヤですよ。別に意地悪とか、本気で思っているわけではなくてですね」

「写メは、俺が確認してからだ」

か、確認？

「確認つてなんですか？ 何を確認するんですか？」

「はああ？ 確認は確認だろ」

邪険な物言いに、いつもならビビるところだが、いまはビビってなどいられない。お宝画像の入手がかかっているのだ。この態度からして、自分の気に入らない画像は、あっさりと削除するに違いない。

そんなことされてたまるものかあゝ！

「だから確認してどうするんですか？ なんのための確認なんですか？ まさかと思えますけど、

先生、自分が気に入らない写真だったら削除するつもりじゃないですよね？」

「俺の携帯の画像だぞ。俺が気に入らなかつたら消すさ」

や、やっぱりだ！

「消すなんて酷いですよ！ そんな意地の悪いこと言わずに、全部転送してください！」

「そんなの俺の勝手……。おい、お前、この俺様に向かって、いまなんてつた？」

ひえっ！

凄まじい目を向けられ、さすがにたじろいでしまう。

「だ、だつて、だつて、いやややや……」

左頬をぐいっと掴まれ、逃げようにも逃げられない。

「いやいでふ。やめへえ」

「ふん」

啓史が手を放し、自由になった沙帆子は、彼からできうる限り離れ、拗ねた目を向けた。

「先生、酷いですよお」

「どうせ、俺は意地が悪いからな」

「だ、だつて……消すなんて言うから……」

「全部消すとは言つてない。俺が必要ないと思っただけだ」

「先生が必要ないって言うのは、先生がひとりで写つてる写真なんじゃないですか？」

凶星だったらしく、啓史はむっとしている。

彼がひとりりで写っている写真なんて相当レアだ。消されてなるものか！

「お願いします！」

沙帆子は手を合わせ、懇願する。

「全部転送してくれたら、なんでも言うことききますから」

「なんでも言うことをきく？ 本当か？」

沙帆子はパッと笑みを浮かべた。

「は、はいっ。なんでもします」

「ふーん。なら、考えなくてもいいな」

その言葉に嬉しがつっていると、啓史はなぜか立ち上がった。きよんとしていたら、彼は机から何か手にして戻ってきた。

「それじゃ、これに一筆書いてもらおうか？」

啓史が差し出したのは、レポート用紙とボールペンだ。

「一筆？」

「この紙に、何を書くんですか？」

「まずは、ここに、『誓約書』と書け」

レポート用紙を指し、啓史は高飛車に命じる。

せ、誓約書？ そんなものなくなつて、わたし、約束はちゃんと守るのに……

けど、それで先生が納得するなら……まあいいか……

沙帆子は『誓約書』と書いた。

「よし、次は二行開けて、『佐原啓史様』と書け」

彼女は言われるまま『佐原啓史様』と書いた。

「よし。次は、『私、佐原沙帆子は、佐原啓史に命じられたことをなんでもいたします』と書け」

『私』まで書いたが、そこでペンをとめて顔を上げた。

「なんでもします、なんて書くのは、なんか嫌なんですけど」

嫌というか……怖い！ ……何をさせられるか、わかつたもんじゃない。

すると、レポート用紙を取り上げられた。

「なら、この取り引きは、お流れってことでいいさ」

「じゃ、写メは？」

紙をゴミ箱に捨てた啓史は、ポケットから携帯を取り出した。そして何やら操作し始める。

「せ、先生、あの？ ま、まさか……」

沙帆子は、慌てて啓史に縋った。

「や、やめてえ！ 先生、書きます。書かせていただきますから！」

沙帆子はゴミ箱に駆け寄り、書きかけの誓約書を拾って啓史のもとへ戻る。テーブルに置き、啓史が先ほど口にした言葉を急いで書き込んだ。

「よし。それじゃ、最後にお前のサインだ。間違えるなよ、佐原沙帆子だぞ」

嬉しそうな啓史の声が上から降ってきて、沙帆子は顔を伏せたまま、唇を噛んだ。くっ、くっそーっ！ ひとの足元みやがってえ。

だが、みすみす負けていられるか。

「先生」

「なんだ？」

「サインをする前に、画像を全部転送してください。転送してもらったら、サインします。全部ですよ。一枚たりとも削除しないでくださいね！」

「ほおっ、ずいぶん強気じゃないか？」

強い口調で言われ、弱気になりそうになるが、腕を組み、必死に踏ん張る。

「お、脅しには、く、屈しませんよ！」

「お前、俺が信用できないってのか？」

凄んでくる啓史に、沙帆子は強気で言い返した。

「写メに限っては信用できません！」

すると、啓史は声を上げて笑い出す。

「わかった。全部転送してやる」

突然好意的になった啓史は、驚くべきことに、すぐさま言葉通りに転送してくれた。

お宝画像をゲットした沙帆子は、歌いたような高揚感を覚えつつ、誓約書にフルネームでサインした。

それにしても、佐原なんだよねえ、いまのわたしの苗字。

きやっ♪

「ところで先生。この、なんでもって、いったいなんなんですか？」

誓約書を眺めていた啓史は、「さあな」とそっけなく言う。彼は誓約書を丁寧に折りたたみ、スーツの内ポケットにしまった。

「これから考えるさ」

そう言った啓史は、凄みのある笑みを浮かべていた。

高揚感はふつとび、背筋が凍った。

……なんか……わたし、愚かな過ちを犯したかも……？

5 乾いた笑い

「ほら、さっさと外せ。遅刻するぞ」

沙帆子がまだ指輪をいじっているのを見て、啓史は急かす。

確かに時間はないけど……そんな風に言わなくなつて。

「わかつてますよお」

沙帆子は唇を突き出し、指輪を指先まで動かしたが、なかなかふんぎりがつかない。

「外すよりないんだぞ」

「だって……」

沙帆子は、眉を寄せた。

包帯を巻いてきたらよかったかもしれない。そしたら、指を怪我しているとかって言っでごまかせたかも……

まあ、ずーっと包帯をつけっぱなしなんて変だし、そんな理由が通るのはせいぜい一週間程度だろうけど……

でも……もうちょっとだけ……

「先生、包帯なんて、ないですよね？」

「包帯？　なんでそんなもの……あつ、まさかお前……」

沙帆子の考えが読めたらしく、啓史は呆れ返った顔をする。

「数日だけでもって思っ……その間に諦めがつくかなって……」

うじうじしていた沙帆子だったが、突然ひらめきを得た。

「そうだ！」

沙帆子は、指輪を指のつけ根まで押し込み、自分の鞆をあさり始めた。

「沙帆子？」

「いいものがありました」

「いいもの？」

「これですよ」

ジャーンとばかりに、沙帆子は取り出したものを、啓史に見せる。

「なんだそれ？」

「もちろん絆創膏ですよ」

「絆創膏？　世の中には、そんな絆創膏があるのか？」

啓史は珍しいものを見るかのように不思議そうにしている。かわいい花柄のものだ。沙帆子はそれで、指輪をくるりと巻いた。

「先生、やりま……フガッ」

大声を上げかけると、啓史の手で口を塞がれた。

「声が大きい」

沙帆子は啓史と目を合わせつつ、こくこくと頷く。

啓史は沙帆子の口から手を外し、彼女の左手を見つめる。

「ねっ、先生。これなら外さなくてもいいでしょう？」

今度は声を抑えて懇願する。

「まあな……けど」

「これを見て、ここに指輪がはまってるなんて思うひといませんか」

「かもな……」

沙帆子はぱっと笑みを浮かべた。

「それじゃ、わたし、行きます」

沙帆子は急いで窓に向かい、啓史の手を借りて窓枠に乗った。

「気をつけてな」

「はい」

啓史の気遣いのこもった言葉に喜びを感じつつ、沙帆子は窓の外に出た。そして振り返る。

「そうだ。先生も絆創膏を貼ったらいいですよ。そしたら騒ぎにならずに……」

「必要ない。それに、絆創膏なんてもつってない」

啓史は沙帆子の通学鞆を手渡しながら、そっけなく言う。

「それじゃ、わたしのをあげますよ」

「馬鹿か」

呆れたように言った啓史は、沙帆子の後頭部に手を当てると、自分のほうにぐっと引き寄せた。

一瞬のキスを交わしたあと、啓史はまるで邪魔者を追い払うように、「ほら、行け」と手で促す。

沙帆子は急いで背を向けた。突然のキスに心臓がドキドキして、彼の顔を見ていられない。

鞆を穴の向こうに投げ、頭を突っ込み、くぐり抜ける。

穴から出た沙帆子は、垣根の向こうにいる啓史の気配を窺った。

寂しいな……

穴をもう一度見つめたあと、沙帆子は教室に向かって駆け出した。

教室に入った沙帆子は、千里と詩織の姿を探した。こちらを見ているふたりを見つけて、手を上げる。

「おはよう」

沙帆子は笑みを浮かべ、ふたりに駆け寄っていった。

「詩織、早いね」

「始業まであと五分だよ。沙帆子がいつもより遅いんだよ」

「あっ、そっか」

照れ笑いをしつつ、千里に目を向けた沙帆子は思わずたじろいだ。

千里の顔が無表情でやたら怖い。沙帆子はおそおそと声をかけた。

「あ……の。千里、どうしたの？」

「あんのねえ……いや……まあさ……その……」

「はい？」

口ごもっている千里に首を傾げると、詩織が沙帆子に顔を近づけて耳打ちする。

「つまりさ、千里はもどかしいんだよ。話したくても用心しなきゃいけないじゃん」

「用心？」

「そお。ねっ、千里」

千里は不機嫌そうに詩織を一瞥したあと、沙帆子に小声で説明した。

「話したいことは山ほどあるわ。だけど、念には念を入れて、学校では話さないようにしたほうが

いいってことよ」

「そうか。結婚式のことか……」

「あ、あのさ。ところで、撮ってた写真。あれ、ふたりとも転送してくれるよね」

「それはいいけど……ああっ！」

返事の途中で千里が叫び、ぎよっとする。そして左手をガシッと掴まれた。

「な、な、何？」

「まさかと思うけど……沙帆子、あんた。これ……」

千里は薬指に巻いた絆創膏をぎゅっと押さえた。

沙帆子はさっと左手を引き抜き、右手で左手を守るように握りしめた。

「ばっかじゃないの！」

「あのさ、こういう場合、あんま騒がないほうがいいんでないかな？」

そう言った詩織に、千里は凍えそうなほど冷たい目を向ける。

千里の表情にビビった詩織は、ごまかし笑いをしながら後ずさった。

「いったい……何考えてんだか」

「だって、外すのやだっただもん」

沙帆子は床に視線を落としつつ、頬を膨らませる。すると、千里にガシッと肩を掴まれ、顔を上げさせられた。

千里の表情は、なぜだか、異常に引きつっている。

「な、何？」

「まさか……」

「えっ？」

「千里、まさかっって？」

横合いから詩織が遠慮がちに問いかけたが、千里の耳には入っていないようだった。

「あんたがこれっってことは……まさかと思いたいけど、ま、まさか、あれなんじゃ」

「これ？」

「あれ？」

千里の言いたいことがさっぱりわからず、沙帆子と詩織は彼女の言葉を一言ずつ分担して繰り返す。

「あんた、どうしてとめなかったのよ？」

沙帆子をじろりと見ながら千里が言う。

「とめるって？」

沙帆子は千里に、耳たぶを引っ張られた。

「ち、千里。痛いよーっ！」

「アホだわ。あんたらみんなアホだわ」

千里はアホを連発すると、大きく息を吸って吐いた。

「千里、だ、大丈夫？」

「落ち着きなよお」

沙帆子と詩織は、興奮している千里にそれぞれ声をかける。

「……わたし……もう知らないっ！」

千里は額に手を当てて嘆いた。

「千里お。いったいどうしたの？」

「悪いけど……しばらくわたしを、そっとしといて……」

乾いた笑いとともに、千里はそう呟いたのだった。

6 おあずけの予感

お手洗いをすませた沙帆子は、手を洗いながら薬指の絆創膏を見つめた。

この下には、結婚指輪があるのだ。

佐原先生とペアの……

授業を受けている間、昨日のことも一昨日のことも……いや、この一ヶ月間のことすべてが夢のような気がして……

この絆創膏の下に本当に指輪があるのか不安になってきた。

絆創膏の端っこをちよつぷり捲り、指輪を確認しようとする。

すると、突然横合いからパコーンと頭を叩かれる。

驚いて顔を上げると、手洗い場の鏡に千里が映っていた。

「ち、千里」

鏡越しに睨まれ、沙帆子は顔を引きつらせた。

「アホっ！」

千里は短く怒鳴りつけ、それでもまだ怒りが収まらないらしく、今度は額をグーでぐりぐりと押しこめる。

「ご、ごめん」

「ほんとにもう。ストレスたまりすぎて、どうにかなりそうだわ」

千里は声を潜めて、ぶつぶつと言う。

水道の蛇口を捻った千里は、手を洗いながら、「ついに……」と口にした。

「……うん？ 何？」

「始まったわ……」

「始まった？」

意味がわからず問い返すと、千里は疲れたため息を零す。そしてついでこいと沙帆子を促した。

教室内はざわめいていた。休み時間はいつもそれなりに騒がしいが、なんだか普段と様子が違う。

「信じられねえな、ガセじゃねえの？ 佐原先生が、だなんてよ」

教室の入り口で話している生徒たちの会話が、沙帆子の耳に飛び込んできた。佐原の名にどきり